**津島　佑子 （つしま・ゆうこ）**

**１、プロフィール**

昭和60年３月、長男大夢の突然の死にあう。これ以降、愛児の死に直面した衝撃と混乱を多く夢という場を借りて、強烈に反映した諸作品を書きついだ。『夢の記録』など。

＜生没＞

1947（昭和22）年３月30日 ～ 2016（平成28）年２月18日

＜代表作＞

『謝肉祭』『葎の母』『草の臥所』『寵児』『光の領分』『黙市』『火の河のほとりで』『夜の光に追われて』『火の山―山猿記』

＜青森との関わり＞

小説家太宰治の次女。作家太田治子は異母妹。

**２、作家解説**

東京都北多摩郡三鷹町で、父太宰治、母美知子の次女として生まれた。本名里子。白百合女子大学英文科卒業。在学中から「文芸首都」等の同人として小説を書き始め、「文芸」「三田文学」などにも短編小説を発表。昭和46年に第一作品集『謝肉祭』を刊行した。

「狐を孕む」が第67回(昭和47年上半期)芥川賞候補になったとき､丹羽文雄はその選評で「いかにも太宰治の娘さんらしい感覚のあふれたもの」とし､「こうした才能は大切に育てたい。発想が新しいが太宰治をはねかえすほどに大きくなるには､他の作家の経験しない苦しみがあることが想像される」と述べた。

昭和48年には『童子の影』、書き下ろし長編『生き物の集まる家』を刊行。旺盛な創作力で発表された作品はまた、多くの賞に輝いた。

受賞作品に『葎の母』(50年刊・第16回田村俊子賞)、『草の臥所』(52年刊・第５回泉鏡花文学賞)、『寵児』(53年刊・第17回女流文学賞)、『光の領分』(54年刊・第１回野間文芸新人賞)、「黙市」(57年発表・第10回川端康成文学賞)、『夜の光に追われて』（61年刊・第38回読売文学賞）、『真昼へ』（63年刊・第17回平林たい子文学賞）、『風よ、空駆ける風よ』（平成７年刊・第６回伊藤整文学賞）、『火の山―山猿記』（10年刊・第34回谷崎潤一郎賞・第51回野間文芸賞）、『笑いオオカミ』（12年刊・第28回大佛次郎賞）、『ナラ・レポート』（16年刊・平成16年度芸術選奨文部科学大臣賞・第15回紫式部文学賞）、『黄金の夢の歌』（22年刊・第53回毎日芸術賞）等がある。

小説のほかにすぐれたエッセイの書き手でもあった。随筆集には『透明空間が見える時』『夜のティー・パーティー』『私の時間』がある。

**３、資料紹介**

〇『夜の光に追われて』

図書

1986（昭和61）年10月24日

195mm×140mm

作品は２つの内容から成立している。一は愛児が浴槽で溺死するという不慮の事故にあった女性作家の＜私＞が、『夜の寝覚』の作者へ生と死の意味を問う手紙。二は＜私＞が欠落部分を補って「夢」「雨」「息吹」の三部に構成した「寝覚物語」である。